



営農NEWS



イネばか苗病の防除対策を徹底してください

現在、新規需要米（飼料米、多収性専用品種など）の栽培面積が拡大しています。そんな中で、イネばか苗病の発生圃場が目立つようになってきました。

ばか苗病は、昔から知られていた病気で、カビ菌により発病しますが、種子消毒を徹底することによって、ほとんど忘れられた病害になっていました。しかし、近年、未消毒種子で育苗されたイネ苗が移植されることにより、本田でも発生が目立つようになっています。

イネばか苗病は、主に種子で伝染します。種子に**ばか苗病菌**が付着、混入していると、育苗過程（浸種、催芽、出芽）で菌が放出され、健全種子にも伝染して発生が多くなります。

このため、購入した種子であっても、種子消毒剤の処理がされているかどうかを必ず確認し、処理されていない種子については、下記を参考に必ず種子消毒を徹底して、ばか苗病を事前に防除することが必要になります。

1. イネばか苗病の主な生態

- 1) 主な伝染方法は、種子伝染です。前年にイネばか苗病菌に汚染した**籾を種子に用いると、種子伝染**します。
- 2) 育苗期では、第 2 葉期以降に症状が現れ、葉や葉鞘が伸びて徒長し、色が淡くなります。
- 3) 本田に移植後も、葉鞘や節間が徒長して黄化し、やがて枯死します。この枯死に至る過程で、株元などに多量の病原菌胞子を形成し、これが伝染源となります。
- 4) 病原菌は風などで飛散して、開花期の穂に付着し、籾に伝染します。

2. 防除対策

- 1) 前年にばか苗病が発生している圃場から、決して自家採種をしないことが必要です。
- 2) **未消毒種子**は、ばか苗病に効果のある薬剤で種子消毒するか、温湯消毒を必ず行います。なお、温湯消毒や微生物農薬による種子消毒は、それぞれの単独処理では効果が劣る場合があるため、これらを組み合わせた処理で効果を安定させます。
- 3) 育苗中や本田でばか苗病が発生した株は、早期に抜き取り、その場に放置せず、離れた場所で土中深く埋設するか焼却します。
- 4) 前年にばか苗病が発生した農家での育苗準備では、作業場を清掃して清潔を保ち、浸種、催芽で使用する容器や機材等は、あらかじめ丁寧に洗浄しておきます。また、苗箱やシート等は使用前に消毒剤（ケミクロンGやイチバン）で処理します。
- 5) 周辺で**イネの種子採取圃が設置されている場所**では、育苗中に**ばか苗病が発生した苗箱のイネは植えない**ように注意が必要です。

3. 種子消毒の方法

- 1) 水稲種子は毎年更新するのが基本です。JA等から購入する**薬剤吹付種子**は、既に**種子殺菌剤**（対象病害：ばか苗病、いもち病、ごま葉枯病、もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病）と**殺虫剤**（対象害虫：イネシンガレセンチュウ）が**吹付け処理されています**ので、そのまま浸種作業に入ります。

2) **未消毒種子の場合**は、

塩水選（うるち品種は比重 1.13）で籾を選別し、次のいずれかで種子消毒を行い、浸種や催芽に入ります。

- (1) 化学農薬（モミガードC・DF [F: 12 と 3 と M1] またはテクリードCフロアブル [F: 3 と M1] などとスミチオン乳剤 [I: 1B]) の規定量液の中で種籾（袋）をゆすって薬液を均一に付着させます。長時間浸漬では、処理中に 1~2 回攪拌します。防除効果を安定させるため、水温は 10~15℃に保ち、処理後は水洗せず、浸種作業に入ります。

注) F は FRAC、I は IRAC コードを記載しました（コードが複数は混合剤）。

- (2) 温湯消毒：「うるち品種」は、種子を 60℃に保った温湯に 10 分間浸漬処理し、処理後は水中で速やかに冷却します。なお、割れ籾が多い場合は、温湯消毒により発芽率の低下する危険性がありますので、避けてください。

- (3) 生物農薬（エコホープ、エコホープDJ、タフブロックなど）は、使用方法、使用時期などで適用病害が異なる場合があります。使用方法、注意点などを十分確認して、適切に処理します。

注) 上記農薬の登録は、令和 2 年 2 月 27 日現在です。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※ JA 全農いばらきホームページでもご覧になれます。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040